二十二日夕刊
磐城新聞
休刊 大祭第一第三日曜
定價 壹ケ月 五十錢（壹枚二錢）郵税十錢
廣告料（一行五十錢指定廿錢增）
發行兼編輯印刷人 蓮沼龍輔
發行所 福島縣平町田町拾六 磐城新聞社

戯曲 カーテン□□□（上）
池上登美路

人物――
畫家　江川（三十歳）
老人　眞木（七十歳）
娘　直江（二十歳）
下宿の女將（四十歳）
刑事　A　B

第一場

現代（初夏の夜）

情景（江川の室、舞臺前面に黒天鵞絨のカーテンあり――中央より左右に開かる物――壁際に肖像畫二三ありて、中央にはイス二個、テーブル、テーブルノ上には洋酒とコップ、寢臺、スタンド畫架、カンバス等ある）

（幕開きてしばらく沈默、江川イスによりてカーテンを凝視して居る）

江川（カーテンに話かける樣に熱にうかされて居る樣な獨言）僕は何か世間で驚く樣な變つた作品を出して見たいと思ふだよ……君は、何時も畫題をあたへて下れたね、……今度も目新しい作品の畫題をあたへてもらうために今日もこうしてまつて居るんだ、それに今日だ、いやもう夜の十時近くになつたんだが少しもヒントをあたへてくれないんだね……（間）……

（女將登場）

女將「おやまだ休まないの」
江川「……………」
女將「江川さん、まだお休にならないの、」
江川（カーテンを凝視した儘うるさそうに）うむ
女將「おや、また何時ものくせが出ましたね。」
江川「氣候は初夏がいゝだらう。」
女將（不審そうに、えゝ何を云つてるの。）
江川（眼を瞑つたり、半ば瞼を細めたりしてカーテンを凝視した儘、種々な表情をしながら興奮して情熱をかけて居る）
女將（益々不審そうに）おかしな人ね、何をいつてるの……そして何を考んがへて居るの
江川……………（間）――（やがて瞑想からさめた樣に、カーテンから目をそらして、テーブルの洋酒をコップにつぎて、それを口にする）
女將「江川さん、何を考んがへていらしやたの」
江川「畫題を、考んがへて居たんだよ」
女將「それはどんなものなの」
江川「判からものか」
女將「おや、どうして」
江川「どうしてつて、判れば考がへなんかしないよ」
女將「そうね、それじやどうしてカーテンばかり視つめて居て、畫題が考んがへられるの。」
江川「説明をしろ、と云ふのかい。」
女將（微笑をしながら）ねゝ
江川（一寸と目を瞑つてから）それは何か或る物を凝つと視めて居ると、其れが何の印象もなくなつて、心は自由な空想の天地をさまよふな事が有るんだよ（又洋酒をコップについで飲む）
江川「どうです、飲みませんか」
女將「私たくさんよ」
江川「そうですか、……それから、昨夜の話の中にも、卜占者が水晶の玉を使ふ所があつたね、卜占者の使つた水晶には勿論、過去や未來を告げる力は無いのだが水しようを凝視して居ると眼前にある俗界のながめを消してしまふ、で、眼をおいて居ても水しようの空虚ばかりを視て居ることになるから、自然に心が超俗の幻を見る樣になるのだ、そうした事と同じ樣に僕がこのカーテンを凝視して居るのもそれと同じ樣な結果を得られるのだよ、判つたかね
女將「ねゝそして今夜はまだその幻の樣なものを得られないとたつしやるの」
江川「そうなんだ、それで徹夜をする考へで居たんだが、徹夜をあきらめて寢ようかと思つて居るんだよ。あんまり何時迄も、いゝ畫題がうかばないのでね」
女將「そう、困るでしよう」
江川「困りはしない、何時までも考んがへて居るから」
女將「そんなら少し氣を變へてから、又考んがへたらどう」
江川「うむ、そうしたいね」
女將「昨夜の話の續は」
江川「よそう、た面白くないから……それよりあなたの話を聞きたいね」
女將「あたしの話つて、どんな話し」
江川「あれさ…………」
（間）
女將「あれさつて？」
江川「判つて居るくせに」
女將「判らないは、だしぬけに、そうたつしやつたつて……何の話なの。」
江川（云ひにくそうに）あれさ、判つてるくせに…いやだな、云へないよ
（つゞく）

明日の吉凶
舊暦十月廿三日　新暦十一月廿三日

▲一白の人　刻々に勢ひ付きて來る日　入學名弘め等尤も吉▲二黒の人　跡から跡からと禍の舞來る日　開店尤も吉▲三碧の人　意の如くならざるも行き違ひなき樣注意すべし▲四緑の人　威高ぶりて蹉跌を招き易し和合第一の日▲五黄の人　自然と活氣付き來り思はず彼岸に達する日▲六白の人　小利に齷齪せず永遠の大計を立つるによき日▲七赤の人　自負心を生ずるときは德望事業共に失墜す▲八白の人　順氣發展し行く日　婚約企業開店何れも大吉▲九紫の人　活動力の減退し易き日持久心を發成すべし

講談 幕末奇傑 高山彦九郎 （4）
西洋々作　布施長春書

双葉の頃（四）

悔悟の色が、うなだれた甚作の横顔に現れたのを見ると、彦九郎は今迄ねぢ上げてゐた手を放してやりました。そして、ひし〳〵肺腑をさすような語調で
「甚作、しかしわしは、お前が心からの惡人でないことをよう〳〵知つてゐる。たゞお身の心に惡魔が魅入つたのぢや。お身の心に魔がのり移つて何もかもの惡事をさせたのぢや。喃、さうだらう、それでわしが今そなたの心の魔を追ひ拂つて進ぜる――」

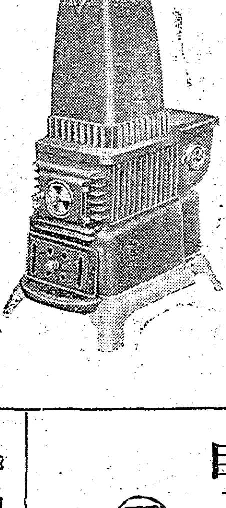
云ひつゝ、彦九郎は腰に帶んだ小刀の柄に手をかけてカチリとつば鳴りの音をさせました。
甚作はびくりとしてその場に腰を落すと、わな〳〵震へ乍ら
「ど、どうか御勘辯なすつて……」と詫びいりました
「ならぬ、そなたの心に魅入つた魔が立ち去るまでは許さぬのぢや！」
「いゝえ、もう〳〵、立ち去りましてございます。若旦那樣、これこの通りでございます。どうか御勘辯なすつて下せわまし」
甚作は手を合せて伏し拜まんばかりでした
「それでは最早、惡事はせぬと申すか」
「へゑ〳〵もう決して……」
「賭博にふけらねさいぶが」
「へゑ、もう、うそだとそんなことはいたしませぬ」
「ふむ」
彦九郎は刀の柄にかけた手を漸くもとにかへしました
「それでは、勿論夫婦喧嘩はすまいな」
「へえ、これからは夫婦仲よく働きます。おい、たとせ」
甚作は側に打ち倒れたまゝに彦九郎の男らしいいさめの言葉にきゝいつてゐた女房をふりかへりました
「俺が惡かつたんだ、許してくんねえ。遲くも今夜迄にや藥代だけでも、きつとこしらへて來るから……なさ、とに角、おめわからも若旦那によくお詫び申してくんねえ」
女房のたとせも亂れた髮をそのまゝに、居ずまひを正して、彦九郎の前に手をつきました
「若旦那樣、お足を止めまして何とも申し譯ありません。これからは決してこんないさかひなどいたしませんから……」
「ふむ。さうか」
彦九郎は、滿足さうにうなづきました。
「それでは、分つてくれたといふのだな」
「はい、もうよく分りましてございます。」
「ふむ」
しかしまだ彦九郎は立ち去らうとはしませんでした最前、ちよつと小耳に挿んだ甚作の『遲くとも今夜までにや藥代だけでもきつとこしらへて來るから……』といふ言葉、それがどうにも腑に落ちなかつたからです
「時に立入つたことをきくようぢやが……」
聞かうか聞くまいかと幾度かためらつた後、漸く思ひ切つて、彦九郎は訊ねました。
「どういふ譯で、こんな貧苦しい、いさかなどしたのかな。それを聞かして貰ひたい。」
「はい、別にこれといつて」
「ないと云ふのか」
「へね」
甚作はもじ〳〵しながら言葉を濁してしまひました
「ふむ」彦九郎はその儘口をとぢて了ひましたがまた思ひ出したように
「しかし、何か譯がなくてはかなふまい。差しつかへなくば話して下さらぬか」と熱心に訊ねました

芳醇無比
白馬の雪
松本德一吟釀
電話（平）七五二

貸地廣告
平町郡役所より税務署附近の新開地に五百餘坪の貸地があります、然かも完全な土盛でありますから流失其の他の憂ひ絶對になく商店、諸工場並に高級の住宅地として最もの適地を極く安値にお貸しいたします
御希望の方は電話なり戴けば社員が御伺ひして親しく御相談に應じます
小名濱商事株式會社
平出張所
電話 六〇三番 五四一番

外科一般（入院隨意）
内臓外科專門
花柳病科
平町六丁目（橋際）
木村外科醫院
電話三〇九

暖爐界之征服者
ネンシヨウストーブ
經濟的連續完全燃燒
消費節約
火防衛生
優美堅牢
簡便を欲せらるゝ御方は是非御試し下さい
御請求次第カタログ進呈
（久）釜屋商店
電話九一三九番



宮内省御用達
ヒゲタ醤油
醸造元 銚子醤油株式會社
特約店 平町田町 廣瀬支店
電話五四番

夜間診療
胃腸 内科 十二指腸虫病 專門 内科部
淋病 婦人病 皮膚病 專門 外科部
松村胃腸性病科醫院
（平南町電話一〇七番）

寒さの御用意
實用品の廉賣
日に増し寒くなつて參りました。寒さの御用意は「緊縮時代」に相應しい「實用品」……と決りました。弊店は「金解禁」を前に安價のどん底を仕入れ、皆樣に買つて戴く事にしました。どうぞ一度御覧下さい。そして御撰擇を願ひます
◎御祝儀一式 ◎七五三祝着品々 ◎銘仙類
◎若尺モスリン ◎友仙モスリン ◎ニコ〳〵新柄
◎ナフトール若尺新柄
龜田屋呉服店
平町三丁目 電話五七番

冬の大賣出し
御婚禮用品各種
丸帶 江戸褄 紡門着
御召 綿紗小紋 袴地
防寒用品各種
レデイコート地 ショール
羅紗オーバー 既成コート
新製 ベビー用品陳列
ベビー洋服 メリヤス肌着
袖ナシ 男女 初着
パンツ各種
平町 三井呉服店

特賣!!
たひら正宗 福島縣清酒品評會一等賞受領
花春 同 優等賞受領
醤油釀造元
鹽屋 山崎合名會社
電話一〇番

流行の最先端!!
本年流行の婦人ショール
可愛らしい子供服
平四 ツルヤ
電一四〇

貸切自動車の御用命は
昭和タクシーへ
高級車で乘心地の好い
昭和タクシー
平驛前
電話は 三四三番 サシミ

營業種目
内地材
材木各種、羽柄材各種
建築諸材請負
礦山用坑木其他諸材請負
外材部
米松、米杉、大角製材調達
請負 其他
（百）佐藤材木店
常磐線平町新川町
電話三三五番

金解禁の及ぼす 石城の經濟界
小農工業は非常な打撃
某消息通の談

石城郡地方の經濟界は昨年來極度の行詰りを告げてゐたが今回現内閣の聲明せる金解禁により直接及ぼす影響につき消息通の觀測によれば大體論的には大きな影響はないと思はれるがよい意味の影響よりは惡い

意味での影響が多い

即ち中央に於ける五大銀行の如く資本がだぶついて其の放資に困難を感じて居る所は金解禁に依り海外投資も自由となり、また内地の金融引締等で利益する點は少くないが却て資金難に苦しんで居るやうな所ではこうした意味のよい影響あるまい、それは極めて緩慢であるかも知れないが、銀行が所有してゐる擔保物の値下りから受ける惡い方面の影響が多少あるものと考へられる。農工銀行の如きは貸付が長期でありまたその貸付額も時價の三分の二程度の貸付しかして居らぬから、土地などの値下りから來る影響は全くないといつてよいが、唯金融の引締から金利の上がるのが一番に憂慮されてゐる、金利が上がるか否かは殆んど今の所

不明である

しまたその程度に就ても尚ほ更不明であるが傾向としては上がる者と見られて居り斯うした時期にあつては債券發行の金利も勢ひ高まらざるを得ない。從つて貸付の金利もそれに準じて高まることとなるから農工銀行としては左程の影響はないとしても同行より借入れをなさんとする農工業者の惡い影響は可成りに甚大なるものがあらう

平教育會の手で 郷土讀本完成
地方の生きた材料を捉へ
來月早々に配本

平教育會では二年前から平町を中心とした郷土讀本を編纂中であつたがいよ〳〵原稿完結し目下東京市に於て印刷製本中で十二月早々出來上り希望者に頒布することになつた、編纂に從事した平第一小學校の中野目、坂内、野木、鈴木、大和田、上川の諸訓導が主としてこれに當り、内容は地理、歴史を主とし鹽屋崎燈臺、新舞子、平町全景、石炭礦、勿來の關その他について讀本の精神にのつとり詳述して磐城の郷土人は勿論一般客が常に求めんとして居た他に誇るべきものであるから出來の上は歡迎されるであらう、内容を各課に分類すれば左の如し

△第一課私の家△第二課郷土△第三課我が町△第四課町の全景△第五課町の通信△第六課町の産業△第八課炭礦△第九課水道の話△十課尼子橋△第十一課義人勝爲△第十二課城跡懐古△第十三課勿來の關△第十四課郷土の學者△第十五課鎮守祭△第十六課寺詣で△第十七課對馬守安藤信正△第十八課軍神大越守佐△第十九課町の取締り△第二十課町の自治△第二十一課職業と教育△第二十二課愛町の心

大工町の 跨線橋
近く渡初め式

平町大工町踏切は跨線道路が地下道に變更するやう同方部に於て猛運動をなしたが成功せず鐵道當局では腐朽してゐる木橋を改修するため鐵骨の跨線橋に改修するやう工事中であつたが此の程漸く竣工を見たので近く渡初式を擧行する由である

潮聲（臨時會）（上）

新潟市の俳人俳書家馬場三葉氏藝術の民衆化運動として當地に行脚せられたのを機とし本潮聲會主催の俳句俳諧會を六日白銀町萬袋店に於て催うしたり其吟席に參會せられたる俳星は、高月會員、萍生會員、本會員等及び遙々相馬より御參列の森櫻軒先生、主客合せて十五名、其句帳は左の如し

一、課題吟　互撰句

秋刀魚（○◎は三葉氏撰の三光、佳作）

追鹽の味馴れて來し秋刀魚かな　天仙
推く砂濱にさんま光りけり　閑月
榾の火に秋刀魚を炙る山家哉　松堂
天秤に柿と秋刀魚の分け荷かな　守穗
○營の鑛小使部屋に秋刀魚燒く　同
○温泉の宿に鹽の秋刀魚を賞しけり　松堂
秋刀魚干す漁村百戸や日本晴　閑月
惜しげなく頭捨てたる秋刀魚かな　同
◎燒秋刀魚匂ふ六軒長屋かな　霧笛
秋刀魚燒く油に煙る夕餉かな　秋月
刑務所の門を秋刀魚の恵みかな　守穗
秋刀魚煙燒く侘しき世帶かな　霧笛
◎漁師町秋刀魚燒く香に暮れんとす　閑月
潮先きの明るくさんまの船幸　一夢
◎聽いつゝ噓移さず秋刀魚選る　櫻軒
○秋刀魚燒きて乏しくねふる地洒哉　何鳴
カンテラの佗しい光に秋刀魚かな　天仙
井戸端にさんま持ち寄る夕かな　揚臺
さんま提げて闇を縫ひ行く小坊哉　萬袋
さんま干す軒端にうすき日射し哉　江亭
七濱やさんま日和に活氣立つ　江亭
ふと入りし路地にさんまの匂ひ哉　曉美
さんま買ひ聲を殘して走り去る　櫻軒
●鹽さんまゆかみしまゝに燒れけり　何鳴
さんま燒く煙にさらす赭顏かな　同
海廣く山はるかなるしさんま船　揚臺
さんま船着きたる宿のどよみかな　晩霞
さんま燒く路地内夕餉小唄かな　揚臺

一、席上即吟　互撰

山茶花（●三葉撰○櫻軒撰）

山茶花やしみ入るやうな日は寒き　霧笛
灯せば皆山茶花でありにけり　三葉
山茶花に賤が伏家の三願かな　江亭
山茶花に石燈籠の背の低くさ　三葉
●山茶花に流るゝ陽筋樹々を透き　櫻軒
●山茶花や日向にむけし小鳥籠　天仙
○山茶花の垣に足袋干す女哉　同
山茶花のほろと散りけり秋死　松堂
山茶花の庭一ぱいに夕陽さす　同
山茶花にやゝなまめきぬ庫裡の庭　曉美

學校敷地と町有地 交換契約成立
道路敷地も委員會で
第三校敷地問題

平町第三小學校建築工事は豫想外に進涉し去る十七日上棟式を擧行來月三月中に竣工の筈であるが問題となつてゐた敷地は地主齋藤繁造氏が頑强に買收に應じなかつたけれども各委員の努力と縣議鈴木辰三郎氏の斡旋により齋藤氏の所有田三反歩と平町有地である共濟病院脇の土地九十七坪を交換する交渉まとまり學校敷地は一切解決したが學校入口をなす道路は佐藤榮吉氏と郡山市の橋本萬右エ門氏で高橋、吉田（五）馬目の三委員は極力佐藤氏に交渉し去る十九日買收交渉をまとめ橋本萬右エ門氏に對しては昨二十一日高橋龜松、吉田五平兩氏郡山に出張橋本氏、交渉した結果買收價格に於て平町の見込みとは可成りの差違あるけれども土地收容法等の煩を避け急速に買收を決定することの有利なる事情もあり近く委員會を開く筈である

磐中生の 赤化防止
各職員善後策

平町を中心に常磐地方に無產者新聞により某無產派の左翼思想の秘密宣傳を計り中等學校生徒にこれを宣傳せんとし某中學校の生徒並に中途退學者がこの事態に關聯してゐたことは既報の如く右は磐中卒業生東京某私立大學生清水勝利（三假名）が無產派と連絡をとり湯本町縣立磐城中學校五年生後藤武郎（二八假名）に該新聞を密に送付し磐中生徒の赤化宣傳を計つたもので磐城中學校では卒業生の中には七八名赤化されてあるが任學生には今回が最初で唐土校長も神系をとがらし職員會議を開きこれが善後策を協議し平署と協力し生徒の不純思想を一掃するは勿論のこと常時これが豫防に努め未然に防ぎ赤化の皆無にする方針をとつた

七十七平支店でも 變造債券を持參
對人本位の山田支店長に
言下に拒絶さる

平署で檢擧した變造債券詐欺事件は既報の如く取調べ進涉し當地方に於ける事件の主魁と見られる上野耕三（五三）北郷竹次郎（五三）鯨岡清一（二八）の三名は二十一日檢事局に送られ武田檢事の取調べ中で今二十二日中に起訴收容の筈であるが彼れ等が平町地方に於ける足跡を開く常盤銀行平支店に行く前日十五日平町南町居住某が右變造五千圓債券を持參して七十七銀行平支店に至り金の融通方を申込むだので小岩貸附係員が右債券を檢分すると僅か不審の點あるので山田支店長に諮ると常に物的信用より對人本位を主義とする山田支店長は言下に之れを拒絶したので翌十六日更らに手を更いて常盤銀行になつたもので百澤易與氏の外此の被害者は比較的債券に無智識の個人金貸業に相當ある見込である

落ちた鐵砲で 胸を打つ
大野村の珍事

石城郡四つ倉町田中岩四郎（四三）は二十一日午前七時半頃石城郡大野村字湯ノ上五草野高松（三八）と共に狩獵に出で大野村玉山地内日の出石城興業會社所有軌道内を進行中岩四郎は彈丸のこめてある獵銃を誤って地上に落とさせるや俄然大音響と共に發砲彈は草野の胸部をつらぬき重傷を負ふた

通常縣會開會
今二十二日午前十時に
政民共に內紛

（福島電話）昭和五年度豫算を審議する本年通常縣會は今二十二日から一ヶ月間開會されるが二十二日定刻十時會議室に各員參列の上小柳知事から開會の挨拶があり、代表として湊縣會議長に對して歳入出豫算議案並に關係議案を手交、これに對して議員を代表して湊議長から挨拶があり開會式終つて一同着席新議員加藤宗平、酒井辰太郎、博多藏人三氏の紹介挨拶があつたのみで一週間の休會となつたが休會明け早々問題の參事會員選擧で各派とも相當內紛を釀してゐる

平町の今年度 前期戸數割
賦課總額四萬七千圓
廿五日町會召集

平町會は二十五日午後一時より役場內に開き左の事項を附議すると

一、昭和四年特別後期戸數割賦課額
一、特別稅戸數割條件施行現定中改正の件
一、特別後期分賦課額決定の件

而して前戸數割賦課額は四萬七千七百六十五圓人員四千六百九十三人で後期賦課額も同樣であるが戸數割賦課納入期は七月十二日であつたが財勢の疲弊してゐる現今に鑑み納期延期變更も相當呼ばれてゐる

田入村副產展

田入村農會では農村の副業產業發展の第一歩として二十三日同村小學校で三村聯合農產物、手藝、加工品の展覽會を開くと

岡部氏來平
昨夕來平滯在

弘前稅務署々長岡部掬氏は十八日から秋田縣並に向河町の釀造業を視察し昨二十一日平稅務署に立寄り明二十三日午前三時二十分の急行で歸弘すると

大浦村助役
大谷氏に決定か

石城郡大野村では助役欠員中で後任助役選擧に終まり紛擾中なりしが愈々明廿三日村會を召集し決定を見る筈であるが大体大谷伊佐吉氏に決定するらしい

平地方の 諸物價
大体異動なし

平町地方の現在主要小賣相場は左の如くであつて金解禁には割合に平靜であるから大した變動はない

△米△白米（一キログラム）上白二十五錢中白二十四錢五厘並白二十四錢△田糯二十七錢△陸糯二十五錢五厘△搗麥古麥△平麥二十一錢白米一俵十四圓見當で去る十七日來全く上下なく新米出廻り初めても高低を見ないので目下だれ氣味である次は木炭

△木炭△雜丸一圓十錢、雜割一圓（四貫小俵）△楢丸一圓三十錢楢割一圓（四貫五百匁小俵）△椚丸一圓六十錢椚割一圓三十五錢（四貫五百匁小俵）

九月以降市與相場には多少の高低を見たが小賣相場には異變なく固定した形である

社告

明二十二日は新嘗祭につき休刊いたします

磐城新聞社

四倉唱歌演奏

四倉　大浦校の尋常科六學年兒童唱歌演奏會は今二十二日午前十時より四倉小學校に開いた

四倉の左樂遊

四倉　劇海盛座に二十三日から帝都浪界の王者東家左樂遊一行の浪曲ある筈觀覽料大人四〇錢婦人小供三〇錢なりと

溜池で溺死
遊戲中顚落して

石城郡波邊村查野殿小野清長男惣吉（二）は十七日午前十一時半ころ家人が庭先にて稻扱に從事中、居宅西側溜池附近に近隣兒童と遊んでゐたが過つて轉落溺死した

蠶業狀態視察
久之濱支所長が

久之濱蠶業取締所支所長愛宕賢氏は二十日佐藤技手と共に桑園視察を兼ね產業團體聯合會事務所に立寄り折柄出張中る渡邊蠶糸課々屬猪狩主事と種々養蠶業に對する意見を交換して午後二時辭去した

俺は警部補だが 旅費を貸して呉れ
驛員を脅かす不審男
四倉署で取調中

二十日午後一時頃四つ倉驛出札係員に對し北海道廳警部補青沼兼吉の名刺を差出し今北海道に歸るのだが金が不足のため貸してほしいと強要中をはり込中の四つ倉署員が探知し、署に同行せしめ、嚴密なる取調べの結果右の者は北海道廳警部補とは眞赤ないつはりで當は双葉郡熊野町天人澤生れ青戸初婦なる・のと判名引續き餘罪ある見込みで取調續行中である

磐新塔

石城の生んだ世界的の製藥王星一氏が彼の大震災直後資金募集に奔走の揚句時の中央生命保險から三十九萬圓を借金した、期間が來ても返金出來ぬので中央生命では矢の突樣な催促を向け結局金の出來るまで京橋にある星製藥の土地建物を擔保として提供せしめた、所が中央生命が經濟的にグラ付き出す、重役の野心家連は星から擔保に取つておく京橋の建物を主体に京ビル株式會社を創立し大ビルヂングの計劃が進行したので星は大いに驚ろき途ひに例の『京ビル事件』を起し擢つた揉んだの騷ぎの揚句星氏は昨二十一日現金三十九萬圓耳を揃ひて中央生命に仕拂ひ京橋ビルは完全に星の所有に歸したが幾ら貧乏だと言つても流石に星は大きい

勇氣百倍　巨彈連發　益々日を追ふて熱火的大興行
中央放送局專屬ジャズ部員及獨唱舞踊團來る
サンライト。チヤズバンド。
本邦絕爲の流行樂ジャズの妙曲に醉ひ給へ

（ジャズ部員）
ピアノ　山田侃
サキサホン　坪川悅郎
バンジョ　高木實
トロンペット　佐藤義夫
ドラム　高木益美
ヴアキオリン　島田正之輔
セロ　淺田晉太郎
クラネット　岩村榮太郎
出演監督　萬城目明
獨唱　東京子
◇舞踊ジャズ曲　數番

ジャズ部員總出演　映畫伴奏　獨唱
◆松竹蓮鎖現代名畫◆
八雲惠美子……主演
◆前篇 君戀し
◆後篇 春の唱
助演…渡邊篤　島田嘉七…其他
獨唱……東京子孃
（全部上映）

第二篇　蜂須賀小六　新妻四郎　櫻井京子　無聲映畫

廿三日替　土曜日　學生デー（料金普通）　平館

耳、鼻、咽喉科
合津醫院
平町仲田町七一（電話五五九）

世界各國特許新形掛時計
文字三ツデ時間ヲ表示スル
一分間表示正確無比
ニユークロック、諸會社病院學校商店向キ着荷致シヤタ、是非御買上ヲ願マス

貴金屬　時計　眼鏡　蓄音機
平町五丁目
金光堂時計店
電話七三六
時計蓄音機修理大勉强

清酒　醸造元　世界 壽
石城小名濱町
清水屋
銘酒　各炭鑛御用達
小野晋平
電話六番

內科小兒科
外科花柳病科
耳鼻咽喉科
レントゲン科
高久病院
平町田町
電話五一〜三番
醫學士　高久忠
醫學士　赤須濟
藥劑士　佐竹喬雄